Kurume University
Psychological Research 2015, No.14, 37–45

原著

コンプリメントスタイルと役割の違いが自尊感情・問題解決ストレングス・レジリエンスに及ぼす影響
－ストレングスカードを用いたコンプリメント－

椿　晃　一[1)]・山　本　眞利子[2)]

要　約

本研究では，大学生80名をコンプリメントスタイル（直接群40名，間接群40名）に割り当て，さらに役割（話し手10名，聞き手20名，観察者10名）に振り分け，４人１グループでコンプリメントを行わせた。目的は，コンプリメントスタイルと役割の違いが，自尊感情，問題解決ストレングス，レジリエンスに及ぼす影響について検証することであった。その結果，自尊感情尺度では事前より事後で話し手，聞き手，観察者ともに得点が有意に増加した。また，問題解決ストレングス尺度の，取り組み因子，援助要請因子では事前より事後で話し手の得点が有意に増加したことが示された。

キーワード：直接型コンプリメント，間接型コンプリメント，話し手，聞き手，観察者

問題と目的

個人の認識をより肯定的に促しうるコミュニケーション技法として，Solution Focused Approachのコンプリメントがある。コンプリメントは，クライエントを肯定することであり，クライエントの希望と自信を高めるとされている（Berg，1994）。中村・山本（2009）は，コンプリメントを参加者が相互に行うことで，肯定的感情尺度得点と自尊感情尺度得点の向上，否定的感情尺度得点の低下が見られたと報告している。つまり，コンプリメント経験は感情の肯定的変化を促すことが示された。このように参加者同士が相互にコンプリメントを行う研究や，参加者自らがコンプリメントを行うセルフコンプリメントに関する研究は存在する。その一方で，異なるコンプリメントスタイルを用いたものや，役割の違いによるコンプリメントについての検証は行われていない。また，ストレングスカードを用いたコンプリメント研究も少ない。

そこで，本研究では，まず参加者を二群に分けた。一方の群は，話し手が，他の参加者から顔と顔を合わせた状態でコンプリメントを聞く，直接型コンプリメントスタイル群（以下，直接群）であった。もう一方の群は，話し手が他の参加者から背を向けた状態でコンプリメントを聞く，間接型コンプリメントスタイル群（以下，間接群）であった。各コンプリメントスタイル群に分けた参加者を話し手，聞き手，観察者の３つの役割に振り分けた。このように，４人（話し手１名，聞き手２名，観察者１名）で構成されたグループでストレングスカードを用いたコンプリメントを行った。間接型コンプリメントスタイルは，コンプリメントする人，コンプリメントされる人のお互いが向かい合わないため，本音を聞くことができ，コンプリメントの際に肯定的感情の効果が期待される。以上のように，コンプリメントスタイルと役割の違いが，自尊感情，問題解決ストレングス，レジリエンスに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

1）久留米大学研究生
2）久留米大学文学部心理学科

仮 説

事前より事後において，各尺度の各因子得点が高くなると考えられる。また，間接群の方が直接群よりも得点が有意に高くなるだろう。

方　　法

参加者

参加者は，大学生80名（直接群：男性19名，女性21名），（間接群：男性13名，女性27名）だった。平均年齢は21.0歳（SD =4.27）であった。

実施時期

2013年10月から12月に実施した。

実験計画

実験計画は，2（コンプリメントスタイル：直接群，間接群）×3（役割:話し手，聞き手，観察者）×2（テスト条件：事前，事後）であった。参加者は，各群40名ずつ無作為に割り当てられた。4人1組（話し手1名，聞き手2名，観察者1名）のグループが各群10グループできた。

質問紙

1．自尊感情尺度

Rosenberg（1965）によって作成された自尊感情尺度の邦訳版（山本・松井・山城，1982）を使用した。1次元性の10項目からなる，“あなた自身にどの程度当てはまるかお答えください”という教示のもと，“1．あてはまらない”から“5．あてはまる”の5件法だった。

2．問題解決ストレングス尺度

山本・菅(2013)によって作成された尺度である。「取り組み(17項目)」「切り替え(13項目)」「援助要請(9項目)」「状況判断（7項目)」の4因子，46項目で構成されている。本研究では「取り組み」「切り替え」「援助要請」の3因子，39項目を用いた。“あなたが問題を解決しようとするときの力（強み，ストレングス，長所）として，以下の項目がどれくらい当てはまりますか”という教示のもと，“1．あてはまらない”から“5．あてはまる”の5件法だった。

3．大学生版レジリエンス尺度

竹田・山本（2013）によって作成された尺度である。「思考・感情・行動の整理（16項目)」「思考・感情の切り替え(10項目)」「ソーシャル・サポートの希求(6項目)」「行動の切り替え（5項目)」の4因子，37項目で構成されている。“日常的な出来事による落ち込みからの回復において，以下の特徴や力は，あなたにどれくらいあてはまりますか”という教示のもと，“1．あてはまらない”から“5．あてはまる”の5件法だった。

4．自由記述

事後質問紙にのみ自由記述で回答を求めた。質問項目は，本実験を終えての感想，実験に関する意見や要望であった。

材 料

1．アイスブレイクの手続き資料

アイスブレイクの手続き資料は，山本（2011）のストレングスアプローチワークブック「小さなストレングスノート」(P.60）を参考に，筆者らがアイスブレイク用に作成したものである（付録1)。

2．ストレングスカード日本語版（竹田，2013)

ストレングスカードは，竹田（2013）によって作成されたものである。計48枚のカードからなり，1枚1枚のカードにはイラストと「粘り強い」や「好奇心がある」など，肯定的な言葉とそれに関連している絵が描かれている。

手続き

図1は手続きの流れを示すものである。各群4名(話し手1名，聞き手2名，観察者1名）で構成され，グループで行われ，所要時間は約40分とした。

直接型コンプリメントスタイル群

1．事前質問紙

参加者に事前質問紙への回答を求めた。その後，参加者を話し手1名（A)，聞き手2名（B・C)，観察者1名（D）に振り分けた。

2．アイスブレイク

話しやすい雰囲気作りを目的にアイスブレイクを行った。参加者には，アイスブレイクの手続き資料を配布した。内容は4分間で，参加者が自己紹介と「小さな…」を紹介するというものであった(付録1)。「小さな…」の項目は「1．小さな楽しかったこと」「2．小さな運が良かったこと」「3．小さなおもしろかったこと」「4．小さなおいしかったもの」「5．小さな笑ったこと」「6．小さなしてもらったこと」の6項目であった。参加者には，“1人1分程度で自己紹介，アイスブレイク資料から「小さな…こと」を1つ選び，グループのメンバーに伝えてみましょう。なお，「小さな…こと」は前の人が選んだテーマ以外のものを選んでください。”と教示した。これを4人とも行った。

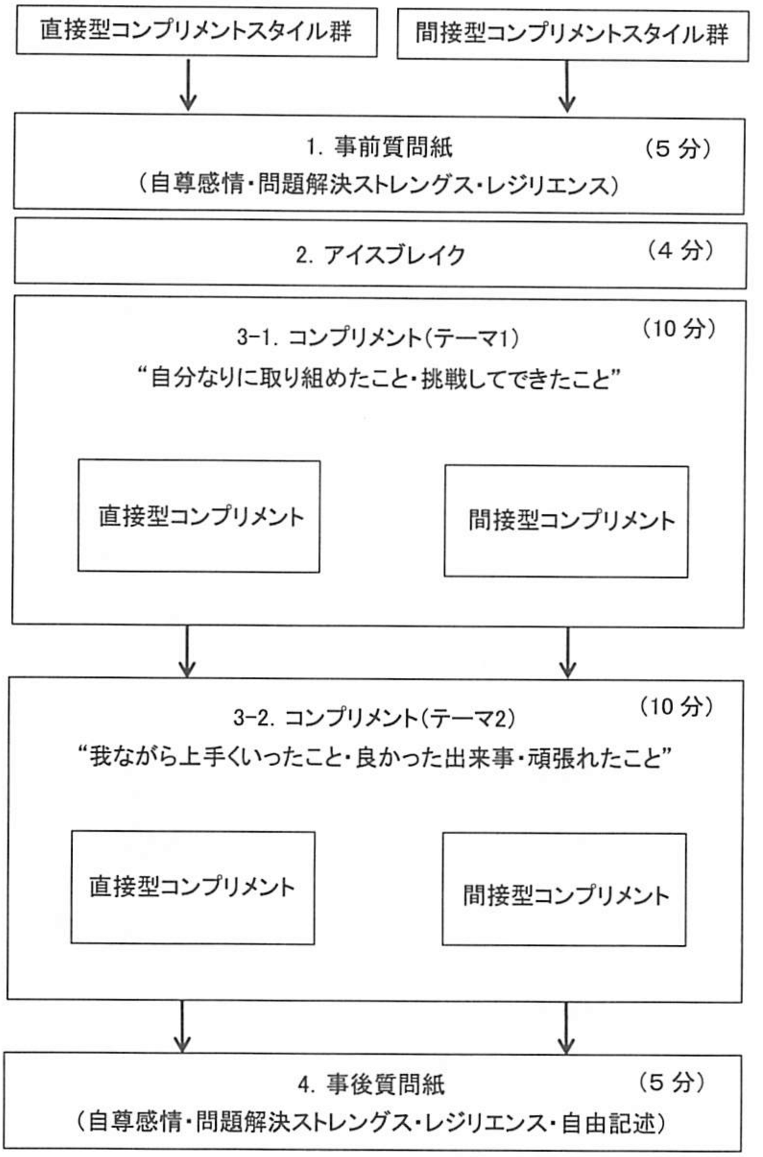

図１　各コンプリメントスタイル群の手続き

3．コンプリメント

参加者の配置を図２に示す。コンプリメントは２回行った。１回目のテーマは“テーマ１：自分なりに取り組めたこと，挑戦してできたこと”，２回目のテーマは“テーマ２：我ながら上手くいったこと・良かった出来事，頑張れたこと”であった。なお，コンプリメントスタイルと役割，手続きは２回とも同様であった。手続きは以下の通りであった。

3-1. テーマ１

①話し手（A）はテーマ１について話をした（３分間）。聞き手（B・C）は話を聞いた。観察者（D）は全体を観察した。なお，話し手は「やめ」の合図があるまで話を続けた。

②聞き手（B・C）は話し手（A）のストレングスカードを１人３枚まで選んだ。

③聞き手（B・C）はそれぞれ順番に２分間ずつスト

レングスカードを用いて，話し手（A）を直接コンプリメントした。話し手（A）はコンプリメントを聞き，観察者（D）は全体を観察した。聞き手（B・C）はそれぞれ「やめ」の合図があるまでコンプリメントした。

④ストレングスカードを回収しテーマ1を終了とした。

3-2. テーマ2

同様の手続きでテーマ2のコンプリメントを行った。

4．事後質問紙

コンプリメント終了後，事後質問紙への回答を求めた。

間接型コンプリメントスタイル群

参加者の配置を図3に示す。間接型コンプリメントスタイルでは，直接型コンプリメントスタイルと手続き3が異なった。手続き3は以下の通りである。

3．コンプリメント

3-1. テーマ1

①話し手（A）はテーマ1について話をした（3分間）。聞き手（B・C）は話を聞いた。観察者（D）は全体を観察した。なお，話し手は「やめ」の合図があるまで話を続けた。

②聞き手（B・C）は話し手（A）のストレングスカードを1人3枚まで選んだ。

③話し手（A）は，他の参加者から背を向けた。聞き手（B・C）は2人でストレングスカードを用いて，話し手（A）を間接的にコンプリメントした（4分間）。なお，話し手（A）は，後ろを向いた状態でコンプリメントを聞いた。

3-2. テーマ2

同様の手続きでテーマ2のコンプリメントを行った。

結　果

2（直接群，間接群）×3（話し手，聞き手，観察者）×2（事前，事後）を独立変数，各指標を従属変数として分散分析を行った。

1．自尊感情尺度

自尊感情尺度得点の分散分析の結果を表1に示す。

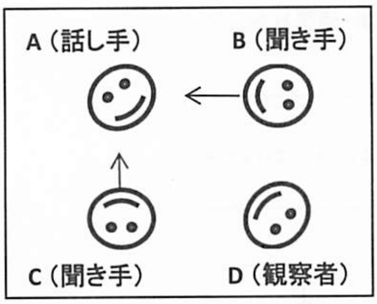

図2　直接型コンプリメントスタイル群の参加者配置図

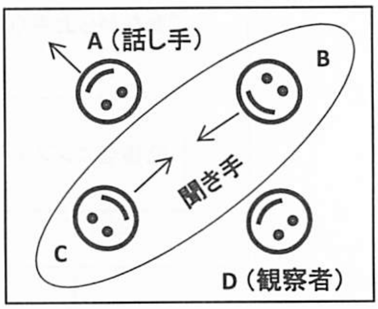

図3　間接型コンプリメントスタイル群の参加者配置図

表1　自尊感情尺度得点の分散分析表

コンプリメントスタイル	役割	事前事後	自尊感情尺度 平均	SD	スタイル A	役割 B	テスト C	A×B	B×C	A×C	A×B×C
							39.34**		3.32*		
直接型	話し手	事前	30.1	6.11							
		事後	34.9	4.44							
	聞き手	事前	32.7	6.47							
		事後	34.1	5.50							
	観察者	事前	30.6	8.06							
		事後	32.9	6.92							
間接型	話し手	事前	28.7	6.23							
		事後	32.2	4.97							
	聞き手	事前	29.2	8.13							
		事後	31.4	6.57							
	観察者	事前	29.6	6.56							
		事後	31.1	7.27							

+p<.10,*p<.05,**p<.01

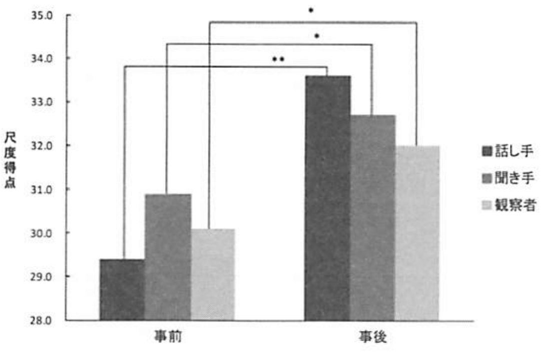

図４　自尊感情尺度得点

分析の結果，テスト条件において主効果が有意であった（$F(1,74)=39.34$，$p<.01$）。役割とテスト条件の間に有意な交互作用が見られた（$F(2,74)=3.32$，$p<.05$）。下位検定により，話し手における事前より事後（$F(1,74)=32.77$，$p<.01$），聞き手における事前より事後（$F(1,74)=6.34$，$p<.05$），観察者における事前より事後（$F(1,74)=6.87$, $p<.05$）で得点が有意に増加した（図４）。

２．問題解決ストレングス尺度

問題解決ストレングス尺度得点の分散分析の結果を表２に示す。

取り組み因子得点では，テスト条件において主効果が有意であった（$F(1,74)=27.35$，$p<.01$）。役割とテスト条件の間に有意な交互作用が見られた（$F(2,74)=4.61$，$p<.05$）。下位検定により，話し手におけるテスト条件の得点が有意に増加した（$F(1,74)=30.12$，$p<.01$）。聞き手におけるテスト条件に有意傾向が見られた（$F(1,74)=3.91$, $p<.10$）（図５）。

切り替え因子得点では，テスト条件において主効果が有意であった（$F(1,74)=12.87$，$p<.01$）。

援助要請因子得点では，テスト条件において主効果が有意であった（$F(1,74)=4.50$，$p<.05$）。役割とテスト条件の間に交互作用の有意傾向が見られた（$F(2,74)=2.73$，$p<.10$）。下位検定により，事後における役割に有意な差が見られた（$F(2,74)=3.62$，$p<.05$）。事後における役割についてLSD検定を行った結果，話し手＞聞き手，観察者＞聞き手で得点が高かった。また，話し手において，事前より事後で得点が有意に増加した（$F(1,74)=7.85$，$p<.01$）（図６）。

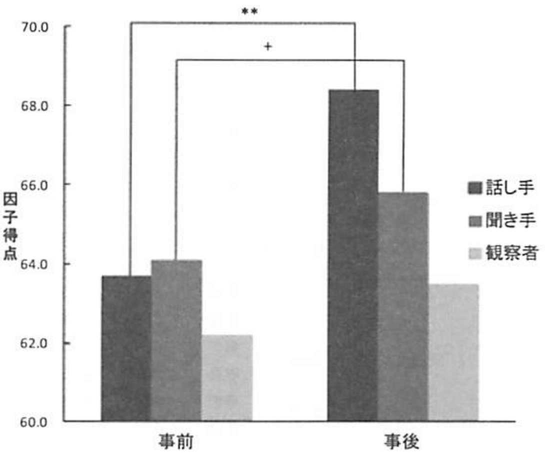

図５ 取り組み因子得点

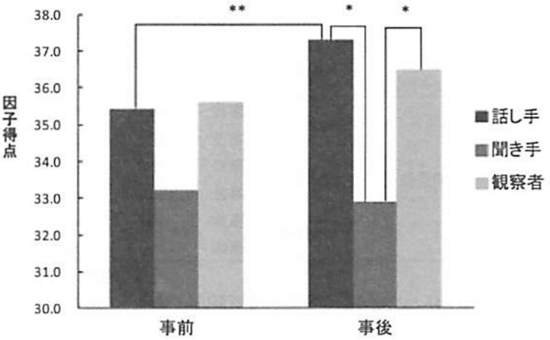

図６　援助要請因子得点

３．大学生版レジリエンス尺度

大学生版レジリエンス尺度得点の分散分析の結果を表３に示す。思考･感情･行動の整理因子得点（$F(1,74)=4.76$, $p<.05$），思考･感情の切り替え因子得点（$F(1,74)=14.35$，$p<.01$），ソーシャル・サポートの希求因子得点（$F(1, 74)=6.04$, $p<.05$）の因子得点が，それぞれテスト条件において事前より事後で有意に高かった。

表２　問題解決ストレングス尺度の分散分析表

			取り組み		スタイル	役割	テスト				
コンプリメントスタイル	役割	事前事後	平均	SD	A	B	C	A×B	B×C	A×C	A×B×C
							27.35**		4.61*		
直接型	話し手	事前	65.0	6.10							
		事後	68.9	5.77							
	聞き手	事前	63.5	9.85							
		事後	65.6	8.42							
	観察者	事前	63.8	8.77							
		事後	65.5	8.10							
間接型	話し手	事前	62.4	4.13							
		事後	67.8	4.56							
	聞き手	事前	64.8	6.89							
		事後	66.0	8.20							
	観察者	事前	60.5	16.10							
		事後	61.5	16.70							

			切り替え		スタイル	役割	テスト				
コンプリメントスタイル	役割	事前事後	平均	SD	A	B	C	A×B	B×C	A×C	A×B×C
							12.87**				
直接型	話し手	事前	45.2	6.00							
		事後	49.4	4.65							
	聞き手	事前	49.9	8.08							
		事後	50.7	9.09							
	観察者	事前	50.4	7.52							
		事後	51.7	7.79							
間接型	話し手	事前	46.3	6.68							
		事後	47.7	6.34							
	聞き手	事前	45.9	10.07							
		事後	48.3	10.76							
	観察者	事前	45.2	12.49							
		事後	46.5	14.40							

			援助要請		スタイル	役割	テスト				
コンプリメントスタイル	役割	事前事後	平均	SD	A	B	C	A×B	B×C	A×C	A×B×C
							4.50*		2.73+		
直接型	話し手	事前	37.1	3.51							
		事後	40.1	1.87							
	聞き手	事前	33.2	5.66							
		事後	32.7	4.56							
	観察者	事前	35.2	4.42							
		事後	35.5	5.68							
間接型	話し手	事前	33.7	4.73							
		事後	34.4	5.42							
	聞き手	事前	33.3	6.5							
		事後	33.1	7.58							
	観察者	事前	35.9	7.52							
		事後	37.4	6.41							

$^{+}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$

表３　大学生版レジリエンス尺度の分散分析表

			思考・感情・行動の整理		スタイル	役割	テスト				
コンプリメントスタイル	役割	事前事後	平均	SD	A	B	C	A×B	B×C	A×C	A×B×C
							4.76*				
直接型	話し手	事前	61.4	6.31							
		事後	64.1	6.66							
	聞き手	事前	62.8	7.66							
		事後	63.4	6.84							
	観察者	事前	66.4	5.99							
		事後	67.9	5.63							
間接型	話し手	事前	60.0	4.77							
		事後	61.8	6.00							
	聞き手	事前	62.7	6.89							
		事後	64.0	7.63							
	観察者	事前	61.0	16.07							
		事後	60.3	15.72							
			思考・感情の切り替え		スタイル	役割	テスト				
コンプリメントスタイル	役割	事前事後	平均	SD	A	B	C	A×B	B×C	A×C	A×B×C
							14.35**				
直接型	話し手	事前	34.4	4.43							
		事後	37.5	3.93							
	聞き手	事前	35.95	5.81							
		事後	37.15	6.99							
	観察者	事前	36.4	6.68							
		事後	37.3	7.36							
間接型	話し手	事前	33.6	5.02							
		事後	35.8	5.95							
	聞き手	事前	33.75	8.60							
		事後	35.55	8.85							
	観察者	事前	32.5	10.89							
		事後	34.6	10.7							
			ソーシャル・サポートの希求		スタイル	役割	テスト				
コンプリメントスタイル	役割	事前事後	平均	SD	A	B	C	A×B	B×C	A×C	A×B×C
							6.04*				
直接型	話し手	事前	24.3	3.07							
		事後	26.1	2.70							
	聞き手	事前	21.3	4.74							
		事後	21.3	4.76							
	観察者	事前	21.7	5.83							
		事後	22.6	5.06							
間接型	話し手	事前	21.8	5.34							
		事後	21.9	4.70							
	聞き手	事前	21.5	5.54							
		事後	22.2	6.04							
	観察者	事前	23.3	5.64							
		事後	23.6	5.10							
			行動の切り替え		スタイル	役割	テスト				
コンプリメントスタイル	役割	事前事後	平均	SD	A	B	C	A×B	B×C	A×C	A×B×C
直接型	話し手	事前	18.4	4.45							
		事後	18.6	5.00							
	聞き手	事前	17.7	4.77							
		事後	18.2	4.90							
	観察者	事前	20.3	3.82							
		事後	20.5	3.85							
間接型	話し手	事前	18.0	2.79							
		事後	18.1	3.96							
	聞き手	事前	17.1	5.34							
		事後	18.1	4.15							
	観察者	事前	18.2	5.60							
		事後	18.1	6.07							

$+p<.10, *p<.05, **p<.01$

考　察

本研究では，コンプリメントスタイルと役割の違いが，自尊感情，問題解決ストレングス，レジリエンスに及ぼす影響について検討した。本研究の仮説では，直接型コンプリメントより間接型コンプリメントの方が，自尊感情得点，問題解決ストレングス尺度得点，レジリエンス尺度得点が高いと考えた。しかし，コンプリメントのスタイルには違いがなかった。

自尊感情尺度得点では，事前より事後で話し手，聞き手，観察者ともに有意に増加し，中村・山本（2009）と一致した。これは，自由記述からも分かるように，話し手が「褒められて恥ずかしい，照れる，認められた気持ちになった」ためと考えられる。また，コンプリメントを行った聞き手の，「人のポジティブな事を話すのは気持ち良い」との記述から分かるように，ストレングスカードを用いることでコンプリメントしやすかったためと考えられる。この点は，ストレングスカードがあることで「コンプリメントするのに役立った。」「ストレングスカードがあることで，上手くコンプリメントすることができた。」「話し手のストレングスカードを選ぶことが楽しかった。」などの感想からも裏付けられる。なお，話し手と聞き手のみならず，観察者においても有意に増加した。これは，観察者の自由記述に，「自分も褒められている気分になった」などがあり，自分を話し手に置き換えていたためと考えられる。

問題解決ストレングス尺度の取り組み因子得点と，援助要請因子得点では，事前より事後で話し手の得点が有意に増加した。これは，話し手の自由記述に，「見つけてもらった自分のストレングスを今後も伸ばしていきたい」などがあり，コンプリメントを受けることで，自分や自分のストレングスが見つかり，認められたことで，問題を解決しよう，援助を求めようと思えるようになったと考えられる。

今後の課題

本研究では，直接型，間接型の両スタイルに違いがなかった。これは，どのようなスタイルでもコンプリメントを行うことで効果があることを示した。本研究における新たな意義は，コンプリメントを受ける，行うのみならず，コンプリメントを行っている場面を見ることの効果についても明らかにした点である。今回は学生間でのコンプリメントだった。今後は，学校，職場における教師と生徒，上司と部下といった，上下関係でのコンプリメントを行う者，受ける者，観察者に及ぼす影響について検証したい。

引用文献

Berg, I.K. (1994). Family Based Services NewYork: Norton（磯貝希久子監訳　1997　家族支援ハンドブック　金剛出版）.

中村大介・山本眞利子（2009）．インタラクティブコンプリメントの効果に関する実験的研究　久留米大学心理学研究紀要　第８号，111-116.

Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image.PrinstonUniv.Press.（山本真理子・松井豊・山城由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究　30, 64-68.）.

竹田七恵・山本眞利子（2013）．日本人大学生のレジリエンス尺度の開発及びレジリエンスと立ち直りと精神的健康に関する研究　久留米大学心理学研究紀要　第12号，1-8.

山本眞利子・菅優子（2013）．大学生の問題解決ストレングス尺度の開発　久留米大学心理学研究紀要　第12号，60-65.

山本眞利子（2011）．ストレングスアプローチワークブック ふくろう出版 60-61.

参考資料

竹田知子（2013）．ストレングスカード キャリア開発研究所

付 録1

アイスブレイク
〜小さなストレングスノート〜

どんな「小さな」ことでもかまいません。
あなたが最近感じた「小さな…」ことをグループのメンバーに伝えてみましょう。
グループでじゃんけんをして，勝った人から順番に下記のテーマを選び紹介してください。
自己紹介（学年・名前・役割・「小さな…」）を1人1分程度でお願いします。

1	小さな "楽しかったこと"
2	小さな "運がよかったこと"
3	小さな "おもしろかったこと"
4	小さな "おいしかったもの"
5	小さな "笑ったこと"
6	小さな "してもらったこと"

Effect of differences in complimenting style and role on self-esteem, problem-solving strength, and resilience − complimenting by strength card −

Koichi Tsubaki (*Reseach Student of Kurume University*)
Mariko Yamamoto (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

In the present study, 80 university students were divided into complimenting style groups (40 in a direct compliment group and 40 in an indirect compliment group), and each was given a role (10 speakers, 20 listeners, and 10 observers). Teams of four people were created to give, receive and listen to compliments. The objective was to determine how differences in complimenting style and role affected self-esteem, problem-solving strength, and resilience. Scores on the self-esteem scale were significantly higher after complimenting than before complimenting in speakers, listeners, and observers. Scores for the activity factor and assistance request factor in the problem-solving strength scale were significantly higher after complimenting than before complimenting in speakers.

Key words: direct compliments, indirect compliments, speaker, listener, observer